

家の匂いはどこからくるの？



今や世の中は消臭ブームですね！消臭剤は夏場の大人気商品となっています。他人の家のニオイはすぐに気になるものの、自分の家のニオイは意外と自分では分かりにくいもの。

しかし、脳波を測定すると、どんな家にもありがちなわずかな不快臭でも、ストレスの原因になっていることがわかってきました。今回はそのニオイの原因と対策を徹底研究します。

日頃ニオイには敏感と思っている人でも、そうとは知らずに自分の家のニオイを嗅がされると、何のニオイか当てることができません。しかも「混ざったようなニオイ」「げた箱のようなニオイ」「よどんだのようなニオイ」「野菜(食べ物)のようなニオイ」など、イヤなニオイだと判定することが大半です。

さらに、脳波を測定すると、鼻ではすぐ慣れて感じなくなる程度のわずかにカビっぽい不快臭でも、嗅いでいる間じゅう、脳はストレスを受け続けていることがわかっています。

人間の鼻は、ずっと嗅いでいるニオイにはすぐに慣れて感じなくなります。この性質を「嗅覚(きゅうかく)の順応」といいます。つまり、自分の家のニオイには順応してしまっているため、どんなニオイなのか分からないのです。

嗅覚をリセットする方法

自分の家のニオイを客観的に感じ取るために、嗅覚をリセットするには、洗いたてのハンカチを1分間鼻に当て、自然に呼吸をしてハンカチのニオイを嗅ぎます。1分たったらハンカチを外し、ゆっくりと鼻から息を吸います。ただし、深呼吸など強く吸い込みすぎると、かえってニオイが分かりにくくなります。

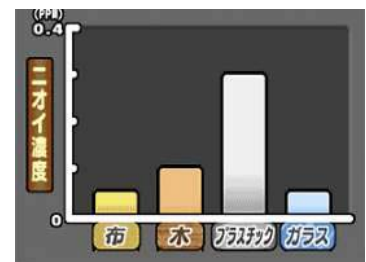
ニオイの原因はニオイ分子

料理や生ゴミなどから空気中に漂い出たニオイ分子が鼻の中に入ると、「ニオイ」として感じます。

この「ニオイ分子」は、静電気や分子間力といったミクロの力で吸い寄せられ、室内にある物の表面にくっつきます。すると、一見ニオイが消えたように感じられますが、実はニオイ分子は部屋の中にくっついて潜んでいるのです！ニオイ分子は室内のどんな物にくっついて、ニオイの原因となるのでしょうか？ 次の4つの素材で実験してみました。

- ① 布 (カーテンや布張りのイス)
- ② 木 (食器棚や床板)
- ③ ガラス (窓ガラス)
- ④ プラスチック (テレビ・ラジカセや戸棚)

同じ面積の「布」「木」「プラスチック」「ガラス」を密閉袋に入れ、硫化水素というイヤなニオイのガスを同

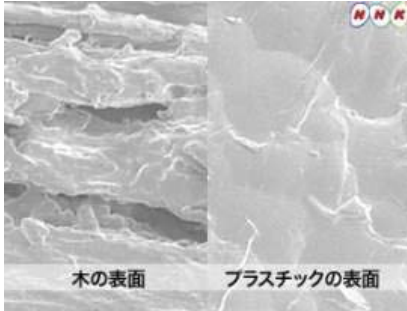


量ずつ注入します。

硫化水素のニオイ分子がどれだけ各素材にくっつくか調べたところ、20時間後にもっともニオイがくっついていたのは「木」でした。

しかし、いったん袋の中を全て換気して、くっついたニオイがどれだけ外に出てくるかを調べたところ、5時間後にもっともニオイが出ていたのはなんと「プラスチック」だったのです！

ポイントはニオイの「くっつきやすさ」と「離れやすさ」



電子顕微鏡で観察すると、木（または布）は繊維が複雑に絡み合い、小さな隙間がたくさんあります。一方プラスチックは、なだらかな凹凸が表面に広がっています。ガラスの表面は非常にツルツルしています。複雑な隙間がたくさんある木（または布）は、隙間の奥までニオイ分子が入り込み、たくさんくっつく性質を持っています。一方、プラスチックは凹凸のある表面にニオイ分子がくっつきます。くっついたニオイ分子は、室温が上がると再び離れようとしてします。しかし、木（または布）の複雑な隙間に入り込んだニオイ分子は、簡単には外へ出られません。一方、なだらかな凹凸面を持つプラスチックは、ニオイ分子を外へ出しやすいのです。

水ぶき掃除の鉄則

ニオイ分子は水に溶けやすい性質があるため、くっついたニオイを除去するには、水ぶきが効果的です。その際は、プラスチックなどツルツルした面を拭く！

キッチンから離れた部屋の隅を拭く！

（調理臭がたまりやすいのは、キッチンから遠くにある壁沿いや部屋の隅！）

洗剤の選び方

ニオイ分子を除去するには、水ぶきだけで十分です。オイルミストなどの油汚れがある場合は、市販の中性洗剤（食器洗いや家具の拭き掃除に使う、水洗い用のもの）を、水で薄めてお使い下さい。洗剤自体のニオイが少ないものがオススメです。

混ざるニオイ・複合臭

水ぶき掃除でくっつくニオイは見事撃退！ それでもなお、家に独特なニオイがこもっているケースが多くあります。

ひとつひとつは悪くないニオイでも、混ざり合うことでイヤなニオイに変化することがあり、これが家庭でも問題になりやすいのです。しかも、こうした「複合臭」はもともと悪臭物質ではないため、消臭剤だけで消し去るのは困難です。芳香剤を置いても、そのニオイが加わったことで、さらに「イヤな複合臭」になってしまう可能性もあります。

「複合臭」を一掃するには、「換気」でニオイを外へ出してしまうのが一番です。しかし、ただ窓を開ければいいというものではありません。では、正しい換気のポイントとは？

換気の極意

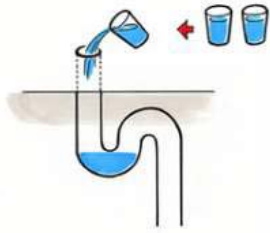
キッチンの換気扇は、空気を吸い出す非常に高い能力を持っています。そのため、部屋の窓を空気の取り入れ口として開け、換気扇を回すと、空気を動かして換気することができます。しかし、換気扇の能力や家の構造によっては、あまりスムーズに空気が流れない場合もあります。そうした場合でも、空気の「入り口」と「出口」の窓を探し当てて換気すると非常に効果があります。

床下の湿気の匂い

お風呂の中のような匂いがする家もあります。浴室内から見て問題は無くても、床下で水漏れしていたり、結露している場合もあるので、注意してください。調べてみると床下の湿気が酷く、まるで水浸しになっている家もあります。この床下の湿気のせいで、家の中がなんとなくカビ臭い時もあります。湿気の多い土地の場合は、十分に床下の湿気対策を行ったほうが良いでしょう。



排水口の場合



「丸1日以上水を流さない排水口がある」という場合は、排水口からの臭いを疑ってみましょう。排水口の先には排水トラップがあり、一定量の水がたまる構造になっています。長時間水を流さずそのままにしておくと、ここに細菌が繁殖し、悪臭の元になってしまうのです。1日に1回、コップ2～3杯程度の水を流すようにすると、あまり使わない排水口でも臭いを防ぐことができます。

また、常に使用している排水口でも、食品のカスや油分、体の老廃物などがパイプに付着していると、悪臭の元になります。

特にひどいときには、市販のパイプ用洗剤を使うことをおすすめします。

室内結露もカビ(カビ臭)の原因に

あまり使わない締め切った部屋で、カビの匂いがする事があります。これは結露が原因のことが多く、一見綺麗に見えても、壁クロスの下がカビで真っ黒などという事も有りますので、注意が必要です。マンションではサッシ部分へ水が流れるほど結露するケースもあります。根本的な解決策としては結露を防ぎ、断熱効果を高め、防音機能も高い「二重サッシ」に取り替えるという方法が効果的です。

細菌が原因の場合

住まいの中で、悪臭を発生させる原因のひとつが細菌です。細菌は空気中に浮遊する細菌で、生ゴミや人間の汗・垢などに集まり、それらの有機物を分解して増殖。そのときに出る物質が、悪臭の元になります。キッチン、排水口、下足入れなどは注意が必要な場所です。

生ゴミの場合

細菌による臭いで特に強烈なのが生ゴミです。「1日以上三角コーナーに入れっぱなし」、「収集日まで家の中に置いておくことがある」という方は、自分では気づいていなくても臭いが発生している可能性はかなり高いといえるでしょう。

水分を切って臭いを抑える

細菌は有機物を分解するときに水分が必要ですから、その水分を取り去ることで細菌の繁殖を抑え、その結果臭いを防ぐことができます。

そこで、生ゴミは、まずしっかりと水気を切り、その上で、吸水性の高い新聞紙などに包んでからゴミ袋に捨てるようにしましょう。

また、缶やカップ、トレイなどのような燃えないゴミも要注意。食品の残りカスに細菌が繁殖しますから、必ず内側を水でよく洗い、さらに水分をよく切ってから捨てましょう。

消毒用エタノールで細菌をノックアウト

それでも臭う場合は、消毒用エタノールをスプレーで直接吹きつけるのが効果的です。また、ゴミ袋の底に酸素系漂白剤を少々入れておくと臭いの発生を防ぐことができます。そのほか家庭にあるものでは、お酢や乾燥させた茶ガラを生ゴミに振りかけることで、臭いをやわらげることができることも覚えておいてください。

最後に、消臭剤・芳香剤の効果と正しい使い方

ここまでご紹介したように、まず自分の家の中に匂いの元となっているものが無いかどうか、家の中をゆっくり見回し、対策を講じてみてください。

それでも完璧に解決できない場合は、最終手段として消臭剤などの力を借りましょう。

消臭剤等の効き目が薄いと感じられるケースでは、消臭剤等を空気がよどんだ場所(トイレの場合、奥まった隅など)に置いてい

ることが多いようです。消臭剤も芳香剤も、消臭成分や香り成分を、換気による空気の流れに乗せて、空間全体に広めることがポイント。そうすれば、消臭剤・芳香剤を多く使わなくても、ほどよいレベルで心地よい空間を作ることができるのです。では、がんばって快適空間をつくりましょう！



道具よもやま話(8)

道具よもやま話

8

前挽大鋸の終焉



わが国の大工は、職人氣質(かたぎ)といわれるように、昔から仕事の質に関わる道具と材料については並々ならぬこだわりをもってきました。また道具をつくる側の鍛冶も大工の心意気に応じようと、心根を込めて多くの優れた道具を生み出してきました。ここでは職人のやりとりの中から生まれた様々なエピソードを、紹介します。

広島から車で北へ約1時間余り、中国山地の山峡に千代田という古い町がある。この三上新三郎商店を神戸の道具鍛冶・宮野裕光さんの案内で、嘉来さんと一緒にお訪ねした。当主の新三さん(大正12年生)は、鋸鍛冶の家を継いで4代目に当たる。文久3年(1863)生まれのおばあちゃんは、天保3年(1832)創業と言っていたそうだが、本格的に鍛冶を始めたのは明治になってかららしい。



初代新三郎さんが、どこで修業してきたのかは、はっきりしないが、京都らしいといわれているから、近江甲賀かも知れない。代々、木挽の前挽鋸を専門に造ってこられた。

町外れにある当家は、街道を挟んで右側に店と住まい。向かい側に大きな仕事場と倉庫が並んでいるが、今は鋸の目立職人が二人しかいない。昭和15年(1940)頃の最盛期には職人も30人を超え、目立てだけでも10人も並んでいたとのことである。



肝心の鍛冶場だけが住まいの裏に2棟あり、前挽きを打っていただけに火床も大きなもので、長さ2尺、巾1尺の前挽鋸を打った時には、向鋸が7人掛りで「トントン トテテ トッテンカン」と鋸書が威勢よく響いていたという。しかし、時代の波は、ここにも容赦なく迫った。昭和46年(1971)から炉の火も消えたままである。

この読み物は、竹中大工道具館元副館長・嘉来園夫ならびに元館長補佐・西村治一郎の2名が主となり、「道具・よもやま話」と題して竹中工務店社報(1983年発行)に連載したものを、改めてここに転載したものです。

30年前の記述のため、古くなった内容もございますがご容赦下さい。